

京都大学経済学部同窓会誌 9号

上海訪問記

森棟公夫

4月より研究科長・学部長になりました森棟公夫です。よろしく申し上げます。私は1969年に経済学部卒業、大学院博士課程の途中でスタンフォード留学、その後経済研究所に26年間居りました。途中、イリノイ大で2年、スタンフォード大で1年、西オーストラリア大で1年、上海の復旦大学で集中コースを教えた経験もあります。専門は計量経済学です。経済学部には異動したのは01年10月でした。経済学部では今年度から工学部と組んだ経営管理、法学部と組んだ公共政策という二つの専門職大学院が発足しました。その結果11名の教員は経営管理と、2名は公共政策と二足のわらじを履くこととなり、またまた忙しさが増えています。経済の先生達は小さい学部にもかかわらず大学内では大きな学部と同じ事務負担を果たさねばならず、授業負担の増加があり、さらに独法化以後は授業評価を初めとして種々の評価も加わったため多忙さがましています。予算も昨年度5%削減、今年度3%削減で、減ることがなかった昔と異なっています。そこで、学部内では先生達の負担を減らす方策を考えています。他方、学部内のコンプライアンスを進めることを考えています。たとえば、同窓会の法人化といった改革ですが、社会ではCSR(企業の社会的責任の遂行)が進行していますから、大学内のコンプライアンスは当然でしょう。

大学の事はこれくらいにして、5月の中旬に訪問した上海について、私の感想を書きます。上海では、復旦大学にある経済学部の上海センターや、同大学の管理学院を訪問して交流協定などの話をしましたが、管理学院はビジネススクールで、素晴らしい施設を持っています。教室も扇形階段教室で、扇の要の位置に教壇があります。ビジネススクールと言えば、どこもこういう形式の教室を持っていますが、京大では無理のようです。先にも書いたように、90年9月にこの管理学院で一月間集中講義をしました。元々89年に計画された授業でしたが天安門事件で反古になり、1年後に実現した授業です。その時の建物も今の建物の横に残っていました。5分の1位の大きさの古ぼけた建物ですが、当時の中国としては最新鋭でした。上海ではまだ暑い9月に、窓を開け放して全身汗だらけになりながら教えたことをなつかしく思い出します。チョークは質が悪く砂が入っていてキリキリ鳴り、黒板もハゲチョロケ、近くに空軍の飛行場があり、10分に一回は戦闘機の編隊が頭の上を轟音を残して飛び立っていきました。私は大学の近くのホテルに住んで、毎朝バスで大学に通いました。中国語が分からないので、貧弱な公共交通機関で通うことは大変でした。バスには準急と各停があるのですが、私はどちらか分からず適当に乗っていました。ボロバス、もの凄い混み具合で、扉近くに止まれなくてバスの中に押し込まれてしまうと、駅の近くで「give me my way」とか適当な英語で怒鳴り続け、人々を押しつけてバスを降りました。上海の人は怒鳴ります。怒鳴ると少し注目をえます。バス代は10角でした。10分の1元、当時のレートを忘れましたが、5円くらいですか。夕方は、上海の住居の貧しさを垣間見ながら歩いて帰りました。狭い、汚い、くさいということですが、トイレも共同

でした。便所に住居がくっついていて、管理人が住んでいました。京大に留学中の陳くんが帰省していて、両親の家に招待してくれました。25 m<sup>2</sup>ほどで、両親と彼プラス弟が生活しているということでした。ひどい場合は、25 m<sup>2</sup>のアパートに子供の家族も一緒に住む、3世代一緒のこともあるなどと教えてくれました。住居費が無料の国でしたが、住宅投資は遅れており、上海では一人当たり5 m<sup>2</sup>が確保できなかったようです。(数字はうる覚えです。)

上海経済の中心は南京路ですが、南京路が黄浦江に突き当たるところにある外灘(ワイタン,バンド)には、外国によって建てられた戦前の建物が多く残っています。ここには、鄧小平の改革開放が始まって間もない84年にも来たことがありました。復旦大学の唐国興氏曰く、戦前は、ワイタンには犬と中国人は立ち入るべからず。84年は、和平飯店に泊っていました。その折り、近くにある上海大廈で最後の夕食会がありました。このホテルは戦前、日本を含む諸国のポリティックスとデカダンの巣窟だったところです。84年では格式は何か残っているものの、建物と設備は古いままでした。私たちは夕食会の後、上海大廈の屋上に上り、電気もあまり灯っていない上海の町を眺めました。そして、改革開放が始まったとはいえ、この暗闇はこれから明るい町並みに変わっていくのだからと大きな不安を抱いたものです。特に、このホテルから黄浦江を眺めれば、この川の対岸は全くの暗黒だったのです。90年の訪問の際も和平飯店には食事に来ており、経済研の上原一慶氏と、84年に比べれば担々麺の味が落ちたなどとしゃべっていました。南京路には店が増え、上海一の百貨店ができたりして、84年の不安は杞憂に過ぎなかったのかなどと思ったのです。90年では、黄浦江川沿いのプロムナードは若いアベックが集まる場所になっており、文革から改革開放への和やかな時代の変化を感じることができました。上海最後の日は国慶節(独立記念日)で、南京路に100万の人が集まり花火を見たのですが、改革開放を楽しむ人の多さに感心していました。このとき、黄浦江にはトンネルが掘られる計画があり、対岸の開発が始まるといった夢のような話を聞いたのです。

ところが16年たった今回では、ただの暗黒だった黄浦江対岸の未開拓地が浦東(ブードン)という巨大都市に変わっていました。実は、飛行場も浦東に移って巨大化していました。未完成だとはいえリニアモーターも新幹線のように疾走していました。トンネルは3本、そして橋は一本でしょうか。(数字は大まかです)90年には、上海で初めての高速道路が建設中でしたが、今の上海は車の洪水。上海人は食べることで精一杯だったのですが、今は大学の先生達も車を買えるそうです。90年以後に建設された高層アパート群は、すでに古びてきています。大学新卒の給料は国中均一の月108元だったのですが、今はどうなったのでしょうか。90年の黄山旅行では朝の3時にバス停に行き、練炭火鉢で料理する屋台でぼーぼーと立ち上る湯気の中で朝食を食べ、ポロバスに乗って出発したのですが、あの活気に満ちた朝市はもう消え去ったのでしょうか。ポロバスの外には、バスにしがみついている人さえいました。私は、ワイタンから黄浦江の対岸にそびえる高層ビル群を眺め、上海大廈から昔見た暗闇や、開放を味わうかのように黄浦江公園に集まって来たアベックを思い出して、社会主義国の開発速度のすさまじさに圧倒されていました。